

令和7年度

日章学園

鹿児島育英館中学校

入学試験問題

国語

(時間 45 分)

(注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外の所を見てはいけません。
- 2 問題は9ページあります。解答用紙は1枚です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、出身小学校名と氏名を記入しなさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具を置き、解答用紙だけをうら返しにして、机の上に置きなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

① 物知りはだいたいにおいてもの考えない傾向がつよい。古くからこれを「物知りの馬鹿」と言った。他にも、「なんでも知っている馬鹿」とか「学問のある馬鹿」などもこれに当たる。(Ⅰ)、知識はあるけど、自分でものを考える力、新しいことを考え出す力がない人のことである。これは人間としてはあまり高級ではない。そういうことは昔からすでにわかっていた。(Ⅱ) 一方で、常に満点の答案を書けるような、正確な記憶をもっているものは人間以外に存在しなかった。そこで記憶力の優れた人間が、^⑦尊重されてきたのである。

ところが、今からおよそ六〇年前に、二〇世紀中ごろ、かのコンピューターというものが登場した。これは人類にとって大事件だった。いくら優秀な人間でも知識を詰め込むには限界がある。それに対して、コンピューターの記憶は正確無比だ。記憶、知識に関して人間はコンピューターに勝てるわけがない。実際、さまざまな場面において人間はコンピューターに負け、仕事を奪われてきた。

近年は大学まで出た人が就職難でウロウロしているけれど、コンピューターに仕事を奪われた結果だと考えられる。大学を出ても知識や事務処理^①についてコンピューターにかなう能力を持っている人はすくない。^⑦ゴウリテキに考えれば、知識しかない人間などもはやいらぬことになる。なぜなら、コンピューターのほうがずっとノウリツ^⑤がいいからだ。優秀なコンピューターを一台備えれば、何十人ぶんの、いわゆる事務的な仕事をこなしてしまふ。下手な人間を雇^{やと}うよりよっぽどいいわけだ。

これまでの人間は、のんびり知識だけ溜^ため込んでいけば、試験に合格することができた。試験に合格して学校を出れば、社会の中でエリートとして生きてゆかれた。しかしそんなのんきな時代は、コンピューターの登場で終わってしまったはずである。

人間は非常に保守的な生き物だ。いったん始めたことはなかなか変えない。コンピューターが現れて六〇年。最近になってみんなやっつと、人間というものの本当の力がいったい何なのか、少しずつだけ気づき始めた。すくなくとも、ものを記憶して、それを再生するという機能だけでは、充分ではない。記憶と再生に関しては、人間はコンピューターにとてもかなわない。長い目で見れば、そのうちに、多くの場面で人間の代わりにコンピューターが仕事をするという時代がやってくる。その時すべての

人間が失職するというのであれば、実に哀れなことだ。元々、コンピューターは人間がこしらえたものなのに、そのコンピューターによって人間が仕事を失い、生きがいがまで失う——そんなことにならないためにも、知識万能主義から脱却だつきゃくしなくてはならない。

中学卒業後すぐに社会に出た人と、大学を出てから社会に出た人を比べると、単純な知識量は大学卒のほうがすぐれている。しかし、ものを考える力は、中学卒の人に大学卒の優秀な学生が負けるということがときとして起こる。そういう事実を目の当たりにすると、長い間お金をかけて学校なんか通うのはばかみたいに思えてくるかもしれない。実際、日本に名だたる大企業の中には、当時の小学校を卒業しただけで社会に出た創業者が創り上げたものがある。

ただ単に名門の学校を卒業しただけという人は、知識や技術は持っているけれど、本当に自分でものを考え、ものをつくり、世のため人のために働くのだというセイシンには欠けていることが多い。

では、どうしたら立派な人間になれるのか。深刻に考えなくてはならない問題である。これはコンピューターに考えてもらおうというわけにはいかない。

実は、すべての人間は天才的な能力を持って生まれてくるのである。ほとんどすべての子どもが例外なく、素晴らしい記憶力、素晴らしい感覚力を持っている。ところが残念なことに、その赤ん坊を育てる周りの大人たちが「人間を育てる」ことをまるで知らない。だいたい子どもが持って生まれた天才的能力を活かしきれずに枯からせてしまう。親のことを悪く言いたくないけれど、事実だからしかたない。

子どものもって生まれる天賦てんぷの才能には、消費期間がある。われわれの一生の間で、一番頭のいい時期、人間としての可能性が最も大きい期間は、生まれてから四〇カ月くらいしかない。あとは徐々に力が落ちていく。小学校に通うころには生まれた時の何分の一かになっている。中学や高校に進むとさらに落ちて、大学に行くころにはずっと低いレベルにまで落ちてしまう。

みなさんは「中学生より高校生のほうが偉い」、「中学生はまだまだ幼稚ちひだ」と思っているかもしれないが、これは間違い！むしろ中学生のほうがまだ生まれつきの能力が残っている。それが年とともに、上の学校へ行くと、どんどん失われていく。

すべての人が赤ん坊の時は素晴らしい力を持っている。その能力がうまく育っていなかったとしたら、それはまわりの責任。

人類は教育というものに関して、いろいろな努力をしてきたけれど、いまだに正しい方法が見つからない。それどころか③でもない間違いをしているようにさえ見える。

ちなみに、生まれたばかりの赤ん坊の能力がいかに高いかということを示すいい例がある。それは「ことば」。ことばを知って生まれてくる子どもは一人もいない。しかし、一般的な育てられ方をしていれば、四〇カ月の間にいちおうはことばを理解し、使えるようになるのである。

その間、「ことば」というものを教える先生がいたのか？ 実のところ、いないに等しい。赤ちゃんにとってどういうことばが一番大切かということを考えながら教えている親は、ほとんどいない。だから親は、幼児のことばの先生としては失格である。そういうあわれな先生に育てられながら、たった四〇カ月ぐらいの間にことばをマスターする。ほとんど例外なく言葉を覚える。

こういう驚異的な能力は英語の発音なんかについてもいえる。例えば、「th」と「s」の音の区別は、普通の日本人にはほとんどできない。「t」と「r」の発音も、中学ぐらいから英語の勉強を始めたのでは耳で聞き分けるのはむずかしい。しかし、赤ん坊のときに英語をきかせていけば、それらの発音はなんでもないことだ。

小さいときのこのものすごい能力。それをわれわれは長らく見誤っていたのである。赤ん坊は何もわからない。知的な活動なんてぜんぜんできない。こう思いこんできた人間は大きな間違いを犯してきたことになる。さらにおどろくべきことに、われわれは頭の中に、自分なりのことばの「文法」をこしらえている。それは、たいへん細かく、複雑で微妙な文法である。赤ん坊の頃からきちんとことばを覚えてくれない大人の中にあつて、無意味なことばをたくさん聞きながら、その中から不要なことばを捨て、大事なものだけ拾って、自分自身の力で文法をつくりあげる。たいていの子がその力を持っている。死ぬまで持ち続けるけれども、それを自覚することはない。

*問題作成の都合上、文章の一部を変更しています。

(外山 滋比古「知ること考えること」より。)

問一 ―線部ア①の漢字は平仮名に、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 (Ⅰ)と(Ⅱ)に当てはまる接続する言葉として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ そして ウ しかし エ なぜなら

問三 ―線部①「物知り」とあるが、どのような人のことですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問四 ―線部②「天才的能力を活かしきれずに枯らせてしまう。」とありますが、「天才的能力」とはどのような能力ですか。本文中から二つ抜き出しなさい。

文中から二つ抜き出しなさい。

問五 ―線部③「とんでもない間違いをしている」とはどのようなことですか。適当なものを全て選び記号で答えなさい。

ア すべての人間は、素晴らしい能力を持っており成長する中で能力は大きくなっていくこと。

イ すべての人間は、親のことばで成長するが、ことばを大切と考えながら教えている親はいないこと。

ウ すべての人間は、素晴らしい能力を年を重ねるにつれて失っていくこと。

エ 素晴らしい能力が育たなかった原因は、自分自身が努力をしていないということ。

二

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

太二(ぼく)は中学ではテニス部に入っています。テニス部では一年生が昼休みにコートならしをすることになっていますが、グーパージャンケン一発勝負をし、人数の少ない側になった人たちが整備するという決まりでした。影で相談して誰か一人だけをはめるのはなしだと、先輩から言われていたのですが、ある日、武藤の提案で末永一人をはめることになってしまいました。太二は武藤の言いなりになったことを後悔し、こんなことが続くようになってしまったらと悩み、周りに対しても疑い始めています。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったにちがいない。武藤ではなく、久保か末

永を呼びとめていても同じ不安が広がっていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうのしかえしに、末永がなにかしかけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしでもうしあわせて、たとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がすぎつぎ頭にかげ、これはおもっている以上に厄介だと、ぼくは頭を悩ませた。^①

やはりキャプテンの中田さんに助けってもらうしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きついおもいをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分がカタンした悪だくみのツケとして不安におちいっているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するの筋だろう。

① そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭にはいっていなかったが、ぼくはようやく自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下に出ると、武藤が顔をうつむかせてこっちに歩いてくる。

「よ」

「おっ、おっ」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をうかべた。そんな姿は見たことがなかったので、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんにうちあけたのではないかと、ぼくはおもった。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。たっぷり怒られるだろうが、それでケリがつくならかまわなかった。

給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。しかし集まったのは一年生だけだった。ぼくは落胆すると同時に^②

自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張で青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況で、きのうはハメて悪かったと末永にあやまったら、どんなテンカイになるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがってどうらまれて、末永だって怒りのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふうにグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、(A)グーかパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて収拾がつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で、カイシンのショットを決めると、応援しているぼくたちにおかたってポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョコキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョコキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があった。

「太二、わかったよ。おれもチョコキにするわ」

久保はそう言ってグーからチョコキにかえると、とがらせた口から(B)を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかってその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョコキにかえて、

輪のなかにさし込んだ。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もないし、今日はチョキがブラシをかけるよ」

そうやって、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかった。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅をあわせて歩いてみると、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大股でブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大股になってブラシを引いていく。

③ ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もっともっと強くなれるはずだ。

ぼくはいつか、テニス部のみんなに、父がつくった豆腐を食べさせてやりたいとおもった。さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいとおもい、押入れにしまっている四本のラケットのことを考えた。ぼくはブラシを引きながら、胸のなかで父と母と姉にむかってVサインを送った。

*問題作成の都合上、文章の一部を変更しています。

(佐川 光晴「大きくなる日」より。)

問一 — 線部ア⑦⑧の漢字は平仮名に、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 — 線部①「ぼくは頭を悩ませた。」とあるがどのようなことに悩んでいるのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分と武藤が会話をしなくなってしまい、関係が悪くなってしまったこと。

イ 周りの友達を疑うようになってしまい、一度の過ちが頭から離れないこと。

ウ 武藤が今度は自分をハメようとしていることに気付き、恐怖を感じていること。

エ 次のじゃんけんでは、なにを出すのか周りに相談をするのか考えていること。

問三 — 線部②「ぼくは落胆するのと同時に自分の甘さに腹が立った。」とありますが、何を期待していたのですか。

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 武藤が浅井先生とキャプテンに素直に話をして、武藤の責任で解決したこと。

イ 末永がハメられたことを忘れており、何事もなく終わったこと。

ウ 浅井先生と中田さんに、ハメたことを武藤がうちあげ怒られてしまえばケリがつくこと。

エ 自分も同じようにハメられたら、末永一人だけの問題ではなくなる事。

問四 — 線部③「ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。」と感じたのですか。「結束」ということばを使って説明しなさい。

問五 (A) と (B) に当てはまるものとして最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(A) ア 必然 イ 偶然 ウ 当然 エ あえて

(B) ア 熱 イ 言葉 ウ 息 エ 毒

問六 自分の考える「友達から学んだこと」について、あとの条件にしたがい作文を書きなさい。

「条件」

○ 題名や名前は書かないこと。

○ 二段落構成、一二〇字以上一四〇字以内で書くこと。

○ 第一段落には、「友達」とはどのような存在か具体的に書くこと。第二段落には、友達との出会いで自分はどのように変わったかを書くこと。

○ 原稿用紙の使い方にしたがって書くこと。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

土砂降りの雨がここ数日降り続けている。梅雨の特有の大雨である。これは一種の年中行事のようなものだ。^①そうはいつても、例年に比べて雨量が格段に多いようだ。日本列島の各地から、さまざまな被害の報告が届いている。^②この荒れ模様の天気もそろそろ終わりを告げる。なぜなら、太平洋上の高気圧が梅雨前線を北へ押し上げているからだ。

問一 線部の文を、(例) にならって文節に分けなさい。(例) 庭に／赤い／花が／さいた。

土砂降りの雨がここ数日降り続けている。

問二 に当てはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア そこで イ さらに ウ だが エ つまり

問三 線部①「これ」が指し示す内容を、文章中から抜き出さなさい。

問四 線部②の文から、主語と述語を抜き出さなさい。

問五 線部③「そろそろ」が直接かかっている言葉(修飾している言葉)として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 荒れ模様 イ 天気 ウ 終わり エ 告げる